準備講座① 国語問題の答え方

テキストを始める前に、国語問題の答え方のルールを改めて確認しよう。国語の解答形式は、主に三つに分かれる。それぞれの答え方を覚えよう。

1 記号・番号を選ぶ場合

(1) 「荒海や佐渡(さど)によこたふ天の川」という俳句に詠(よ)まれている季節を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 春　イ 夏　ウ 秋　エ 冬

正解 ウ

誤答例 秋 「記号で答えなさい」という条件を無視している。

誤答例 う 選択肢の記号（片仮名）と違う記号を書いている。

□記号・番号は設問どおりに書く。

正しい答えがわかっていても、答え方が違うと不正解になる。段落番号や傍線番号や選択肢の記号が入り組んで、一つの大設問に「1、①、(1)、[1]」が同時に出ることもあるので、設問だけでなく、文章中でも記号や番号を区別する習慣をつけておこう。

(2) 次の文の――線の中から、助動詞を全て選び、記号で答えなさい。

▪昨晩①の②天気予報③で④「明日⑤は⑥朝⑦から⑧晩⑨まで⑩雨⑪が降るでしょう」と言っていた。

正解 ⑦ ⑧ ⑪

誤答例 ⑦ ―― 「全て選び」とあるのに、一つしかない。

□設問文の条件を守る。

「二つ選びなさい」や「当てはまらないもの（不適切なもの・正しくないもの）」などの条件を見落とさないように、設問文をよく読もう。

2 抜き出して答える場合

「ではみなさんは、そういうふうに川だと言われたり、乳の流れたあとだと言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、①上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、②みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがするのでした。

〈宮沢賢治(みやざわけんじ)「銀河鉄道の夜」より〉

(1) ――線①「上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところ」を、先生は何と言っていますか。文章中から九字で抜き出しなさい。

正解 ぼんやりと白いもの

誤答例 ぼんやりしろいもの 書き写し間違えた部分（「と→（消失）」「白→しろ」）がある。

□文章をそっくりそのまま、正確に書き写す。

「平仮名」「片仮名」「漢字」の使い分けに注意して、句読点やかぎかっこなどの符号も全て文章どおりに抜き出して書こう。

(2)　――線②「みんなに問いをかけました」とありますが、ジョバンニが考えた「問い」の答えを、文章中から一語で抜き出しなさい。（正解「星」）

誤答例　みんな星だ　「一語で」という条件を守っていない。

□設問文の条件を守って抜き出す。

抜き出す部分がわかっていても、条件どおりの解答になっていなければ不正解になる。設問文を最後まで読み通し、条件を守って答えよう。

3　自分の言葉で書いて答える場合

〔　役人の庄兵衛は、島流しの刑になった喜助を小舟に乗せて、大坂に向かっている。〕

「喜助。①お前何を思っているのか。」

「はい」と言ってあたりを見回した喜助は、何事をかお役人に見とがめられたのではないかと気づかうらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺った。

庄兵衛は自分が突然問いを発した動機を明かして、役目を離れた応対を求める言いわけをしなくてはならぬように感じた。そこでこう言った。「いや。別にわけがあって聞いたのではない。実はな、おれはさっきからお前の島へゆく心持ちが聞いてみたかったのだ。おれはこれまでこの舟でおおぜいの人を島へ送った。それはずいぶんいろいろな身の上の人だったが、どれもどれも島へゆくのを悲しがって、見送りに来て、いっしょに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くにきまっていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へゆくのを苦にしてはいないようだ。いったいお前はどう思っているのだい。」

喜助はにっこり笑った。「御親切におっしゃってくだすって、ありがとうございます。なるほど島へゆくということは、ほかの人には悲しい事でございましょう。その心持ちはわたくしにも思いやってみることができます。しかし②それは世間でらくをしていた人だからでございます。」

〈森鷗外「高瀬舟」より〉

(1)　――線①「お前何を思っているのか。」とありますが、庄兵衛がこのような質問をした理由を、文章中の言葉を使って、二十五字以内で書きなさい。

正解例

喜	助	が	島	へ	ゆ	く	こ	と	を	苦	に	し	て	い	な	い	よ	う	だ	か	ら	。			

誤答例

喜	助	が	島	へ	ゆ	か	さ	れ	る
全	く	苦	に	し	て	い	な	い	こ

こと　を、

「理由」を問われているのに、「出来事」を答える形でまとめている。

マス目の使い方が正しくなく、字数が設問の指示に合わない。

□設問文をよく読み、「何を問われているのか」をつかむ。

問われている物事に対応した形で文末をまとめよう。

例 ■どういうことか。→「……こと。」　■なぜか。→「……から。」「……ので。」

■気持ちを書け。→「……という気持ち。」「……うれしさ。」　心情を表す名詞

□指定字数を守る。

例 ■○字。→○字ちょうどで答える。　■○字以上△字以内。→○～△字内で答える。

■○字以内。→少なくとも○字の八割以上は書く。

□一マスに一字ずつ書く。

指示がない限り句読点などの符号も一字と数え、一字ずつマス目に書き込もう。

(2)　――線②「それ」とは、どういうことを指していますか。次の文の□に当てはまる言葉を考えて、五字以内で書きなさい。（正解例「悲しい事だ」）

■島流しの刑を受けるのを□と感じること。

誤答例

悲	し	む		

空欄に当てはまらない。

□空欄に当てはまる言葉を書くときは、当てはめて読んでみる。

当てはめたときに意味が通じるか、文法的な間違いがないかを必ず確かめよう。